今週の為替相場見通し（2017年1月4日）

総括表		先々週および先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		116.05 ～ 118.24	117.07	117.00 ～ 119.50
ユーロ	（ドル）		1.0352 ～ 1.0652	1.0522	1.0200 ～ 1.0500
（1ユーロ=）	（円）		121.60 ～ 123.87	123.00	121.00 ～ 124.00
英ポンド	（ドル）		1.2201 ～ 1.2501	1.2328	1.2000 ～ 1.2300
（1英ポンド=）	（円）	*	142.18 ～ 147.48	144.50	142.00 ～ 146.00
豪ドル	（ドル）		0.7160 ～ 0.7313	0.7199	0.7100 ～ 0.7300
（1豪ドル=）	（円）	*	83.75 ～ 86.17	84.22	84.00 ～ 86.00

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替市場第一チーム　渡邉　康太

（1）今週の予想レンジ：　117.00 ～ 119.50 円

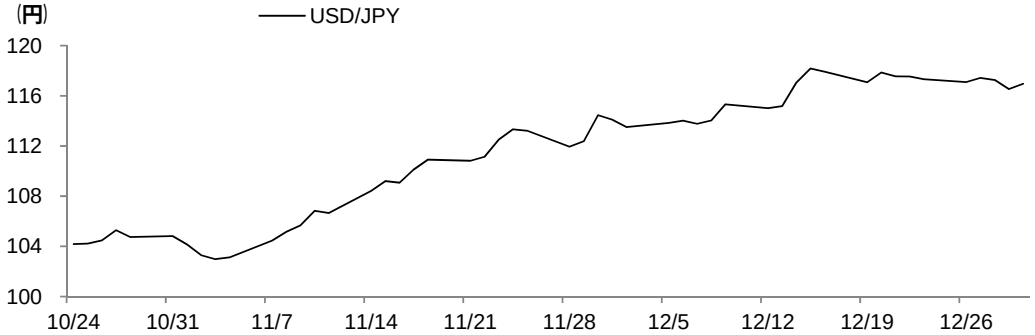
（2）ポイント【先々週および先週の回顧と今週の見通し】

先々週・先週のドル/円相場は年末にかけて値を下げる展開となった。19日、117円台後半からスタートしたドル/円は、ドイツにおいてクリスマスマーケットへトラックが突入するというテロ事件発生などを受け、リスク回避的な動きから円買いが進行、116円台半ばまで下落した。一方で、イエレンFRB議長が講演において、米国労働市場の力強さを強調したこともあって米金利が上昇、ドルが買い戻される流れとなった。翌20日には118円を回復するが、クリスマス休暇を控え上値追いも続かず反落。ドル買い一巡後はクリスマス休暇を控え徐々に利益確定の流れが強まり、ドル/円は117円台前半へじわじわと下落した。翌週前半も月末需要と見られる本邦輸出勢の売りが見られ、やや下押しする場面も見られたが根強いドル買い需要を背景に下値を切り上げ117.80円台を一時回復した。しかし、28日海外時間に行われた米5年債入札において旺盛な米国債需要が確認されたことで、米債利回りが急低下し、為替はドル全面安、加えて年末に絡むアセットアロケーションとみられる動きも散見され、株式市場が総じて弱含む中ドル/円は急落し、117円を割り込む展開となった。30日は流動性が薄い中、東京時間の朝方にユーロがアルゴリズム関連と見られる買いを背景に急騰すると、相対的にドル売りが強まり、ドル/円は安値116.05円をつけた。しかし、急反発する株式市場を横目に押し目買いが入り、117円台を回復。その後は年末で徐々に参加者も少なくなる中、117.07円で年内を終えた。

今週のドル円/相場は底堅い展開を予想する。先月末のドル/円は年末で市場参加者が少ない中、ポジション調整が主な動因となった。特に調整が顕著に見られた米国債は月末・年末に絡む債券買い需要が一巡すると、年明けからは反転・上昇し始めている。足許のトランプ次期大統領の政策期待に伴うドル高地合いを変えるような材料は特に出ておらず、今月20日（金）に予定されている米大統領就任式までは期待感先行の相場が継続か。6日（金）には米12月雇用統計など重要な経済指標が多数発表されるが、市場予想を大幅に下回るような数字とならない限りは、米金利上昇、ドル高地合い継続となろう。ドル/円は先月つけた高値118.66円を前に本邦輸出勢の売りも出てきやすいタイミングだが、年明けで新たなポジション構築の動きも相応に入りやすく押し目買い需要も強いものと思われるため、ドル/円は徐々に下値を切り上げていく展開を予想する。

（3）先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週（12/19～12/30）の値動き：安値 116.05 円　高値 118.24 円　終値 117.07 円



（資料）ブルームバーグ

2．ユーロ

為替営業第二チーム　西谷　鷹

⑴ 今週の予想レンジ：　1.0200　～ 1.0500　　121.00　～ 124.00　**円**

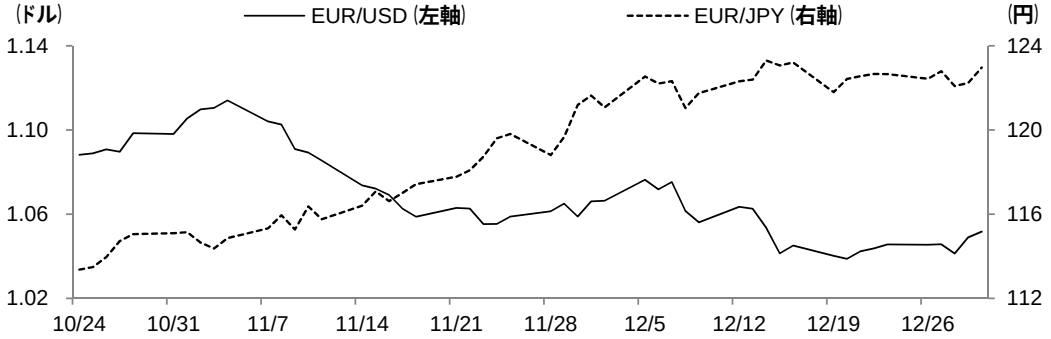
⑵ ポイント［先々週および先週の回顧と今週の見通し］

先々週のユーロ相場は下に往って来いの展開。週初19日、1.04台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、イエレンFRB議長のタカ派な発言や米金利が上昇する動きにドル買いの流れが強まり、1.04台割れまで下落。20日もドル買い地合いが継続する中、一時週安値となる1.0352をつけた。21日には1.04台半ばまで反発する場面が見られたが、ロンドン仲値にかけてのドル買い需要や伊大手銀行の年内増資完了が失敗に終わる可能性が高まったとの報道に、1.04台前半まで再度下落。22日は、発表された米経済指標が事前予想を下回ったことなどを受けて米金利が低下すると、ユーロ/ドルも一時週高値1.05をつける場面が見られたが、クリスマス前で一段と上値を試す雰囲気でもなく、すぐに1.04台半ばまで押し戻されると、23日にかけても同水準で方向感なく推移し、そのまま1.04台半ばで越週した。先週のユーロ相場は上昇する展開。週初26日、1.04台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、26～27日とクリスマス休暇で主要マーケットが軒並み休場となる中、動意に乏しい展開が続き、同水準で方向感なく推移。28日は一時週安値となる1.0372まで下落する場面が見られたものの、29日にかけて米金利が低下したことなどを背景に全般的にドル売り優勢の展開となると、1.04台後半まで反発した。30日は特段材料がない中で、ストップロスオーダーを巻き込みつつ一時1.06台後半まで急騰する展開となったが、すぐに1.05台半ばレベルまで反落し、その後は年末で流動性が薄くなる中、徐々に落ち着いた相場付きに戻り、1.0522で越週した。

今週のユーロ相場は上値の重い展開を予想する。先週は年末にかけてのポジション調整を伴った米株下落、米金利低下の動きに、ユーロ/ドルは一時1.06台後半まで急騰するなど、やや荒い値動きとなる場面が見られたものの、あくまで一時的な動きと思われる。マーケットのメイントピックは依然としてトランプ米次期大統領の政策期待を含む米国の動向であり、米大統領選以後続いている米金利上昇、ドル高の流れは継続するものと考えている。今週は月初であるため米国より12月雇用統計を始め多くの重要指標が発表される週であり、その結果に一喜一憂する展開が想定される。特に市場予想比強めの数字となった場合、米金利上昇の動きと相俟って、より敏感にドル買いで反応する可能性には注意が必要であろう。ユーロ/ドル相場は強力なサポートラインとして意識されていた1.05を先月明確に下抜け、昨年の安値（1.0352）を付けたばかりであるため、同水準を割り込む展開となれば、下向きバイアスに一段と拍車がかかることも想定され得るところ。ダウンサイドリスクにはより警戒して臨みたい。また今週、欧州から発表される主な経済指標は、3日（火）に独12月消費者物価指数（CPI、速報値）、6日（金）にユーロ圏11月小売売上高などが予定されている。

⑶ 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週（12/19～12/30）の値動き：（対ドル）安値 1.0352　高値 1.0652　終値 1.0522
（対円）安値 121.60　高値 123.87　終値 123.00



（資料）ブルームバーグ

3．英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

⑴ 今週の予想レンジ：　1.2000 ～ 1.2300　142.00 ～ 146.00 **円**

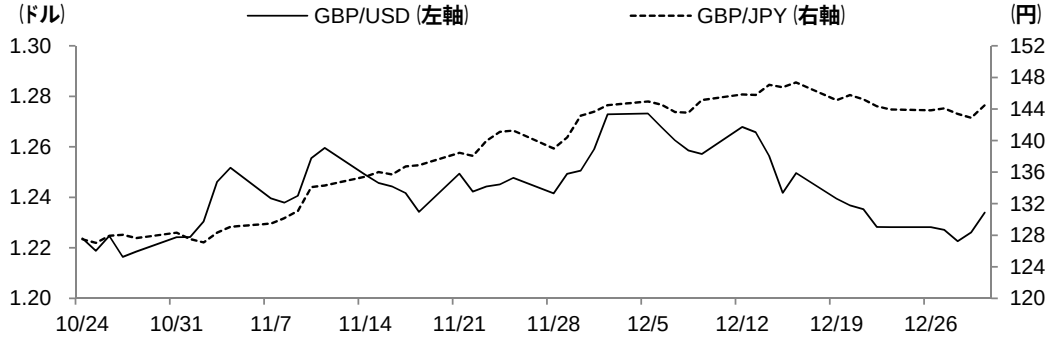
⑵ ポイント【先々週および先週の回顧と今週の見通し】

先々週･先週の英ポンド相場は、狭い値幅を軟調気味の横ばい。細かい上下動はあったものの、それを説明する材料はほとんど見当たらなかった。28日までの通貨市場は全般にドルの高止まりと言える状況で、この背景には引き続き、トランプ新大統領による景気刺激策に対する期待感が大きく作用していたものと考えられた。ただ、この局面、ポンドは円やユーロなど他の主要通貨に対しても緩やかではあるが軟調に推移しており、これと言った材料は特定できなかったものの、ポンド全面安の様相も見せていた。28日以降、相場付きが変わり、ドル全面安に転じたのは、年末を控えた調整的な値動きとの解釈が一般的だった。実際、米株価は明確に反落しており、米長期金利も低下していた。一方で堅調を維持した英株価や米英2年国債利回り格差の縮小はポンドの対ドルでの調整的な反発を裏付けたが、年明け以降も両国の株、債券の値動きは継続したにもかかわらず、ポンド/ドルが一転反落にむかったのは平仄が合わない値動きだった。3日発表された米ISMの12月製造業景況指数の上振れは、ドルの続伸を促し、材料らしい材料と言えたが、そのドル買いも長くは続かなかった。英国発の材料では、3日、英のロジャース駐EU大使の突然の辞任が、対円、対ユーロなどで上昇基調にあったポンドの反落を促した。

今週の英ポンド相場は、特に対ドルで軟調推移継続を予想。年末に観察された要因のはっきりしないポンド全面安にも、EU離脱交渉を目前にした英経済の先行きに対する不安を読み取ることができるかもしれないが、上述ロジャース駐EU大使の辞任が示唆する不透明感は更に大きい。英要人がEU関連の主要ポストから退くのは、昨年6月25日のヒル欧州委員（金融安定･金融サービス担当）辞任に続いて二人目だが、離脱投票直後に即断したヒル委員以上に、ロジャース大使の辞任は重い。この半年、EUとの調整に苦心してきたはずの同大使が、3月末までに始まると予想される離脱交渉を前にそのポストを投げ出すという事実に、同大使の置かれてきた立場の難しさが浮かび上がるからだ。もともと同大使はEU残留派で、離脱交渉を急ぐ英政府とは交渉の方針を巡って意見の対立も多々あったであろうが、EU各方面に深い人脈を持つ同大使の、このタイミングでの辞任は今後の離脱交渉にとっても少なからぬ痛手となろう。経済指標などでは6日（金）の米12月雇用統計が最大の注目となろう。ただ、20日のトランプ新大統領就任式を前に、米経済の先行きは「トランプ大統領の政策次第」との思惑は根強く、従って、米労働市場の現状や、それが米連銀の金融政策に与える影響なども、現時点ではある程度割り引いた反応しか得られないのではないか。余程弱い数字でも出ない限り、新大統領への期待感が先行した足元ドル堅調は当面揺るがないものと見込む。

⑶ 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週（12/19～12/30）の値動　（対ドル）安値 1.2201　高値 1.2501　終値 1.2328
（対円）安値 142.18　高値 147.48　終値 144.50



（資料）ブルームバーグ

4．豪ドル

為替営業第二チーム　坂本 真史

⑴ 今週の予想レンジ：　0.7100 ～ 0.7300　84.00 ～ 86.00 **円**

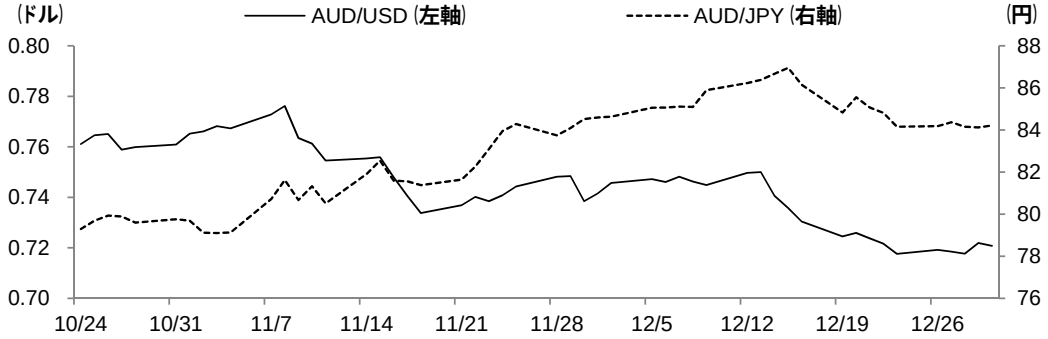
⑵ ポイント【先々週および先週の回顧と今週の見通し】

先々週･先週の豪ドル相場は上値の重い展開となった。対ドルでは、先々週19日には0.73台前半でオープン。モリソン豪財務相が豪政府の2016/17年度（16年7月～17年6月）における財政赤字の見込み値を▲365億豪ドルと発表。市場予想（▲371億豪ドルの財政赤字）を下回り、懸念されていた大手格付け会社による格下げが回避されたことが豪ドルのサポート材料となり、一時0.7313をつけた。しかし、駐トルコ･ロシア大使が射殺されたことや、ドイツでトラックがクリスマスマーケットに突入するというテロ事件発生などを受けて世界的にリスクセンチメントが後退する中、0.72台前半まで下落。翌20日、豪州準備銀行（RBA）議事要旨が発表され、景気見通しは慎重ながらも楽観的と表明。当面は利下げを見送る姿勢を示したものの、相場への影響は限定的となり豪ドルは0.72台で推移。21日･22日はクリスマス休暇前とあって動意が乏しく、0.72台でレンジ推移が継続。週末23日には0.72を割り込み、そのまま0.71台後半で越週した。先週26日には0.71台後半でオープン。一時0.71台半ばまで値を下げたが、一段の下落とはならなかった。その後はほとんどの海外市場が休場となり取引閑散となる中、0.72ちょうどを挟んだ展開。週を通して年末を控えた動意薄の展開で、0.71台後半から0.72台前半を中心としたレンジ推移となる。週末30日には0.72台半ばまで値を戻し、0.72台前半で越週した。対円では、先々週19日には86円ちょうど近辺でオープン。直後に86円を上回るも、その後は豪ドルの上値が抑えられたため、週を通して軟調推移。週末23日に84円近辺まで下落し、84円台前半で越週した。先週26日には84円台前半でオープン。週央28日にドル/円が週高値まで上昇した局面で豪ドル/円も84円後半まで上昇。しかし、翌29日にはドル円が軟調推移したことで豪ドル/円も連れ安となり、84円を割り込む展開となった。その後も週を通して83円台後半から84円台半ばでのレンジ推移となり、結局84円台前半で越週した。

今週の豪ドル相場は、方向感を定めにくくレンジ推移になると予想。今週は豪州で目立ったイベントがない中、豪州以外の動きが材料視されそうだ。まず、産油国が合意した協調減産が今月1日に発効されたことで、昨日3日には原油価格が一時2015年7月以来の高値水準まで上昇したものの、結局反落して引けている。原油価格の上昇は豪ドルのサポート材料となるも、今後協調減産がどこまで実行されるかに注目が集まる環境下、原油価格は不安定な値動きが続きそうだ。次に、米国に目を転じれば、4日(水)FOMC議事要旨、5日(木)米12月ADP雇用統計、6日(金)米12月雇用統計が発表される。FOMC議事要旨は2017年の利上げペースについてどのような意見が出されていたかについて、雇用統計は足元の労働環境に関して、それぞれ確認する上で重要である。しかし、大方の市場参加者の注目は今月のトランプ氏による米大統領就任演説とその後実行される政策内容となりつつある。議事要旨は声明文との大きな乖離がなければ、また雇用統計はよほど悪化していなければ相場の動因とはならないだろう。

⑶ 先々週および先週までの相場の推移

先々週および先週（12/19～12/30）の値動き：（対ドル）安値 0.7160　高値 0.7313　終値 0.7199
（対円）安値 83.75　高値 86.17　終値 84.22



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。